

# 注目の「遺伝性乳がん」

## 大分市で被手術者対象アンケート

### 遺伝性乳がんについてのアンケート

① 遺伝性乳がんについて	
▶ 詳しく知っていた	2.4%
▶ 初めて知った	47.7%
② 遺伝性乳がんについて	
▶ 知らせてもらって良かった	80.6%
▶ どちらでも良かった	16.4%
▶ 知りたくなかった	0.5%
③ 今後患者に知らせるべきか	
▶ 知らせた方がいい	98.1%
④ 遺伝性乳がんの可能性が なら遺伝子診断を受けたいか	
▶ 受けてみたい	17.9%
▶ 受けたくない	13.4%
▶ そのとき考える	65.1%

米女優アンジェリーナ・ジョリーさんが、乳がん予防のために両乳房内の乳腺切除と乳房再建手術を受けたことで知られるようになった「遺伝性乳がん」。うえお乳腺外科（大分市）は乳がん手術を受けた約1800人に遺伝性乳がんについて情報提供とアンケートを実施した結果、「遺伝性について詳しく知らなかったが、正しい知識を得ることができ、知らせてもらって良かった」という声が多かったことが分かった。

## 米女優の公表で認知

## 17.9%が「検査受けたい」

「BRCA1」と「BRCA2」に変異のある人が該当し、70歳までに発症する確率は56〜87%になるとされる。国内では毎年約6万人が新たに乳がんと診断されているが、そのうち5〜10%が遺伝性とみられる。

アンジェリーナさんは遺伝子変異があったため、予防的に健康な乳房の切除・再建手術をした。遺伝子変異のある人は乳がんや卵巣がんになる率が一般の人に比べて10倍以上であるため「乳がん・卵巣がん症候群（HBOC）」と呼ばれる。

今までは家族内で乳がん患者の有無（家族性乳がん）が調べられていた。家族性乳がんとみなされるのは、第1度近親者（両親、姉妹、子ども）に本人を含めて3人以上の乳がん患者がいる場合や、2人の乳がん患者がいて、いずれかが40歳未満、または両側乳がんの場合など。もし家族性乳がんの基準に該当しても、遺伝子検査で変異が確認された場合に初めて、遺伝性乳がんと判断される。

日本乳癌学会研究班が遺



**ポイント**  
乳がんの遺伝子検査（遺伝子検査）は、乳がんのリスクを評価し、適切な予防策を講ずるのに役立つ。検査は保険適用外で約23万円、自己負担となる。県内では大分大学病院産婦人科の遺伝外来で7月から開始の予定。野口病院（別府市）でも準備を進めている。

乳がんの遺伝子検査（遺伝子検査）は、乳がんのリスクを評価し、適切な予防策を講ずるのに役立つ。検査は保険適用外で約23万円、自己負担となる。県内では大分大学病院産婦人科の遺伝外来で7月から開始の予定。野口病院（別府市）でも準備を進めている。

遺伝性について日本人女性に関するデータをまとめていることを受け、2月初旬、うえお乳腺外科は2002年の開設以来、乳がんの手術を受けた患者に遺伝性の情報を提供すると同時に意識や家族歴に関するアンケート

トを送付した。2月末までに回答のあった1198人について内容を詳しく知っていた人は2・4%と低く、初めて知った人が約半数を占めた。今後患者に積極的に情報提供すべきと考えている人は98・1%。もしも家族性乳がん



うえお乳腺外科の上尾裕昭院長（左）と南原明日佳研究秘書

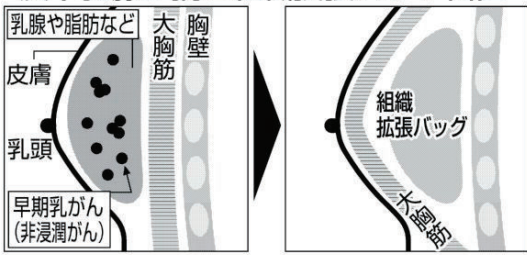
## 予防的切除 倫理的配慮が必要

乳がんの予防を目的とした健康な乳房の切除・再建手術については、国内では統一された指針はなく、保険も適用されない。

予防的な切除・乳房再建手術は、乳房の皮膚や乳頭、乳輪を残して、乳房の端から皮膚を切開して乳房の中にある乳腺を全摘出（皮下乳腺全摘術）、膨らみを保持するためバッグを入れる。両側を同時に再建すると左右対称になり、見た目の美しさ（整容性）を保てる。

病気がない健康な乳房にメスを入れる予防的切除手術には倫理的な配慮が必要。そのため、聖路加国際病院東京（都）などが院内の倫理委員会でも承認し、自費手術での実施に向け準備を進めている。県内の医療機関では実施していない。

### 皮下乳腺全摘と組織拡張バッグ留置



（図）、生理食塩水を注入して皮膚や筋肉を膨らませ

る方法。保険適用なので経済的負担は少ない。数カ月後に形成外科で合成樹脂（シリコーン）バッグに入れ替えるが、この2回目の手術は保険適用外で自費になる（7月から保険適用の予定）。

上尾院長は「予防的切除手術に関しては今後のテーマで、まずは遺伝子検査を受けるかどうかに関して配慮が大切。一人一人が自分で判断できるような正確な情報を提供したい。乳がんの90%は遺伝性ではないので、誰もが日頃から関心を持って早期発見を心掛けてほしい」と話した。

全員に家族性乳がんの可能性（遺伝性のリスク）の有無を郵送した。南原さんは「家族歴や遺伝子検査の希望に関する情報を保管して、相談に来た際はサポートしていきたい」と話した。

上尾裕昭院長は「以前は乳がん告知直後の精神的な負担に配慮して遺伝性を伝えないことが多かったが、日本人のデータが開始したので早めに正確な情報を伝えて過剰な心配を避けてほしい」と思い情報提供をした。同時に、遺伝性乳がんのリスクがある人を選び出す第一歩として、現時点での家族歴をあらためて調査して、その結果を伝えたと話した。（小田原大周）